

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学教育学研究科修士 1年 矢部東志

私がフィリピンを訪れたのは今回の研修が初めてであった。私が意識的にフィリピンと関わりを持ち始めたのは安里先生の授業がきっかけである。2017年の4月からJFC(Japanese Filipino Children)を取り巻く環境について学ぶようになり、実際に彼らへの学習支援に関わるようになった。

不安定なフィリピン社会の現状を学び、JECの子どもたちと関わる中で「フィリピンの現実の姿をこの目で見てみたい」という想いが募り、本研修に参加した。私は教育社会学を専攻しており、JFCの子どもたちが置かれている教育環境がいかにして形成されてきたのかという点について関心が高まって来たのである。移民を送り出す側のフィリピンが、JFCの教育環境に対してどのような取り組みをしているのかという点について実際に現地を考察を行なうことを試みた。

そうした中で今回のフィリピン研修の経験は事前のイメージが全てではないということを教えてくれた。現地に行く前に日本で得たフィリピンに関するイメージは、フィリピンの現実の一面にしか過ぎないということをも身を持って感じた。現実には私たちの想像を超えて多様であり、より複雑に絡み合っているという当たり前の事実を改めて私に思い出させてくれた。

学習支援でJFCの子どもたちに接する中で、彼らの中からフィリピンに対する消極的なイメージを耳にすることが少なくなかった。幼少期をフィリピンで過ごし、学齢期半ばで渡日した彼らは日本と比較してフィリピンに対してあまり良いイメージを持っていないようだった。「治安が悪い」「交通マナーが悪い」といったフィリピン像を実際に現地でも照らし合わせてみると必ずしも間違った見方ではないことがわかってきた。現地では平日の昼間に定職を持たないであろう人々が通りをうろついたり、車上荒らしに失敗した男性が逃走する際に車に引かれる場面を研修初日に目撃したり、大統領が超法規的措置によって次の木曜日を「国民の祝日」にすることを直前の月曜日に突然宣言したりと、日本では想像のつかないような不安定な社会構造が見えてきた。しかし、それだけがフィリピンの姿ではない。

フィリピンは経済成長の真っ只中にあり、マニラにあるマカティの高層ビル群やアジア最大のショッピングセンターと謳われる「Mall Of Asia」の存在に景気の良さが表れていた。街のいたるところでビルの建築現場が観察され、道路は常に車で溢れており、経済を活性化させる動脈そのもののように見えた。見学したマニラ南部のアニメスタジオでは下請けとして日本のアニメを制作しており、アニメ産業の中心は日本からフィリピンへと次第に移り変わりつつあるという。このように景気が良く、産業が成長過程にあり明るい未来が見えるフィリピンの姿もまた現実であることを忘れてはならない。しかし、そうした繁栄の裏では古いバラックの家々も散見され、フィリピン国内の格差が拡大しつつあることが視覚化されているようであった。そうした複雑なフィリピン社会から飛び出した人々が日本へと渡って来るのだということを実感した。

私たちはCFO(フィリピン政府在外フィリピン人委員会)で開かれた10代の海外渡航予定者向けのセミナーを見学させていただいた。セミナーでは職員があの手この手を使って彼らの持つ海外生活の不安を吹き飛ばそうとしていたが、表面的な感情的対処に留まっており、言語の問題や文化の違いを乗り越えるための根本的な解決にはつながっていないのではないかという疑問を抱いた。参加者たちの間からは渡航に際して不安があるという声が聞こえ、渡航先においても心のケアを施す必要があるように感じた。

同じくCFOで開かれた別のセミナーでは、日本で暮らす予定の女性たちに直接インタビューをする機会を得た。彼女たちに日本で子どもを産み育てることについて質問すると「仕事が第一優先で、子どもを持つことはその時にならないとわからない」といった回答が得られた。渡航以前は子育てや子どもの教育にまで頭が回らない人々が決して少なくないのでは、と感じた。また、生まれたばかりの乳児を近々日本へ連れて行くという女性からは「タガログ語で日本語を教えてくれる学校は日本にあるのか」という質問をいただいた。このインタビューの直前に私が母子のコミュニケーションと言語の問題についてのプレゼンテーションを行なったため関心が湧いたのだろう。この件に関して私はCFOの長官代理に質問した。すると、「現在日本にはそうした施設はないが、韓国には先例があるため、不可能なものではない」という回答が得られた。母語で日本語を学ぶという施設の存在は母親にとって嬉しい存在ではあるはずだが、子どもにとってもタガログ語と日本語を身につけることができる最適な場が形成され得るのではという期待を抱いた。

このように、不安定な社会構造によって移民が増加する中、これまでのCFOの取り組みは送り出す際の簡単なケアに留まっており、渡航後の生活や教育について深く取り組みがなされているようではなかった。しかし、長官代理の回答にあったように、今後日本にCFOが関わる日本語学校やタガログ語学校が建設されることが期待される。私の今後の研究においても、教育環境整備を含めた送り出し国による渡航先でのケアの有無に着目し、移住者やJFCたちの置かれる環境の変化に対して目配せをする必要があると考えさせられた。